

# 戦争と菊の子たち

主幹教諭 中村 昌子

まもなく、75回目の学校の誕生日を迎えます。昨年と同じ時期の学校通信では、50回目を迎えるきくまつりについて振り返り、そのルーツについてお伝えしました。今年は、何をお伝えしようかなあといろいろ考えましたが、平和な今の時代だからこそ知っておいてほしい戦争中の菊の子たちについてお伝えします。

私がこのテーマと深く向き合うきっかけになったのは、まだこの学校に赴任して間もない頃、創立50周年記念のきくまつりが行われた時です。その時に50年をふり返るVTRを制作する担当となり、戦争中の子どもたちの様子を細かく取材しようということになりました。そして、附属大泉小学校が当時集団疎開していた群馬県新里村にいさとに取材に行くことになったのです…。

本校の集団疎開は、都内の他の小学校に比べるとかなり遅い時期から始まりました。それというのも当時大泉の地は都内といえども郊外であり、むしろ疎開を受け入れる安全な地区であると考えられていたからです。しかし昭和19年10月に初めてB29の空襲により大泉地区に爆弾が投下されたことをきっかけに、早急に準備を整え、翌20年1月からまず4～6年生の集団疎開が実施されました。その後1～4年生も参加し、約200名の子どもが集団疎開しました。集団疎開は戦争が終わった後の昭和20年10月まで続いたそうです。当時の子どもたちは学寮として準備された5つのお寺に寝泊まりし、午前中は2時間ほどわずかに学習を行い、午後はほとんど配給の野菜運び、近くの農家の草取りなどの手伝いを行っていたそうです。

新里村にいさとの元学寮だったお寺を訪ねる中で、当時を知る方を見つけることはとても困難でしたが、なんとかその頃寮母さんいそをしていたというご婦人に出会うことができ、当時の子どもたちの様子を取材しました。なんといいっても一番大変だったのは食料不足。寮母さんが子どもたちの姿で一番心に残っていたのは、子どもたちが指を口にあてて、ガリッ、ガリッ、と何かを噛んでいる姿だそうです。何をかじっているのかと思って尋ねると生米を噛んでいたそうです。当時の主食はこうりゃん（雑穀の一種）や麦がほとんど。インゲン、青菜、大根、なすやトマトなど野菜が食べられればよかったそうです。お腹がすいてすいて仕方のなかった子どもたちは、手伝いで出かけた農家ででも拾ってきたのでしょうか、こぼれた生米をポケットにしおぼせて、それをかじって飢えを紛らわせていたのです。

これは学校の歴史を綴った児童向けの副読本「のぞみ」にも書いてある有名なエピソードですが、落ちていた青梅を食べようとした子どもたちが、そばにいた子ヤギにせがまれ先に子ヤギに青梅を食べさせたところ、かわいそうに子ヤギは青梅に含まれる青酸の毒で苦しみながら死んでしまいました。おかげで子どもたちは青梅を食べずに命拾いしたのです。低学年の中には、寂しくて学寮を抜け出したものの東京に帰れるはずもなく、物置のわらの中にうずくまって一夜を明かし、先生方に見つけられた子どももいたそうです。

きくまつりで自分たちが育てた野菜を大切に調理し、みんなでおいしく食べるきくのこ汁。戦争中の菊の子たちのつらく厳しい体験を心のどこかに思い出しながら、何でも食べられることに感謝し、生産することを伝統としてきた菊の子の歴史をふり返るきくまつりになることを願っています。